



発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部 ホームページ：http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm  
事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL 043-227-8557



平成25年度 第5回 連続セミナー

『自閉症の就労支援について』

石狩市相談支援センター センター長 大澤隆則氏

自閉症の就労支援を成り立たせることとは、つまり、自閉症の人の「社会参加の機会を保障する」ことである。そのためには、特性理解は当たり前のこととして、いかに「人として」彼らを尊敬しているかである。だから、就労支援者を名乗る人は、企業にその自閉症者の学習スタイルに合った視覚支援を伝え、企業、本人を支え続けることが、自閉症の人の社会参加という人権を守ることではないか、と、大澤先生はお考えでした。

自閉症の就労支援とは、何をどのように支援することなのでしょうか？先生のお話から、以下の点が見えてきました。

①自閉症の人は、認知・関係性の理解の特性から、「働く」という文化がわかりにくい。仕事—収入—買い物（生活・余暇）のつながりを理解するための（学校の作業学習の）工夫等による分かる方法で、「なぜ働いているのか」「なぜ給料がもらえるのか」を教えていく必要がある。

②サービスとしてやってもらうことで自立することができる。日々の「ライフスキル」について、全て自らできなくてもいい。「できない」のではなく、誰による、どのような支援をすれば就労できるのか、整理され、支援されるべき対象の項目である。お金を通じてサービスを受ける等、「結果的に」できればいい。

③就労支援について、「評価→訓練」という就職前の準備段階の重視から、「就労斡旋→定着」というジョブコーチによる就職後の支援の重視に変わってきている。将来のために今をストイックに教育するのではなく、「今の力を使って」「ここで乗り越えられる結果を出すことが、結果的に将来のためになる」という考えから、「評価→訓練」の段階では、その職場で使うスキルを教えていく。障害者雇用をどう理解していくのかを企業と支援者が共有する必要がある。

④実際の就労場面では、本人が活用できる支援を持って就職することが、基本的な考え方となる。

(1)自分の目で見て、自分で把握でき、自分で行動できるという、「自分でできる」ことがとても大事である。やる事が決まっていたり、はっきりしていたりすると言語指示がなくても自分で行動することができるので、視覚支援（スケジュール・ワークシステム・PECS）を工夫して活用することが有効である。絵・写真・文字・線画 等々、どのタイプが本人にとって一番使いやすいか、分かりやすいか、本人にもどれが一番分かりやすいかきいてみる等して、アセスメントする必要がある。特に、スケジュールの活用は、本人の理解・自立と同時に、企業側にとっては雇用管理にもつながってくる。

(2)人間関係でトラブルにならずに、人との関わりの中で自ら生き抜いていく力を高めていくために、自己認知支援が必要である。自己理解と他者評価のずれに気づくことで、助言や支援を受け入れたり、他者に援助を求めたり、苦手を回避したりすることができるようになる。

(3)就労すると、自分から相談しないと相談できないので、相談スキルを教える必要がある。相談のためのワークシステムを用いることで相談の仕方が分かってくる。相談相手として、両親以外で本人を分かってくれる大人、ちゃんとコメントを出してくれる大人の存在が必要である。

\* 彼らの夢の職場とは、「毎日安心して行ける職場」であるというコメントが印象的でした。「安心」とは、彼らにとっての安全が保障されていることであり、具体的には、「せっかちな人」等の怖い人がいないこと、スケジュールにより先が見えること、構造化することで不安が軽減されることだそうです。支援者として、安心・安全な「夢の職場」を増やすべく、取り組んでいきたいと思いました。（文責：岡村）\*

## 大澤氏の講演『自閉症の就労支援について』Q&Aコーナー より

大澤先生のご講演後に寄せられた質問と先生のご回答を紹介します。

**Q** ; 入所施設において、利用者が理解しやすく日常を過ごすことを目的として始めた TEACCH の取り組みを、自分なりのやり方に固執するベテラン職員を含めた全職員で統一して取り組むには、どうしたらよいですか？

**A** ; 施設として、入って間もない若い職員よりは、中堅以上の職員が研修に出る方がよい。若手の職員は熱心に研修会で学んできて、いざ職場で実践しようとしたときに、その上司にあたる中堅職員の理解を得るところから始める必要があります。それよりは、上司である中堅職員の方々が研修に出て、学んだことを職場で伝達する方がスムーズに取り組みが始められると思います。自分（大澤先生ご自身）が、TEACCH について学び、施設長になったときには、利用者一人一人に個別のスケジュールを作成することを施設内で徹底しました。外出するときには、一人一人全員がちがうスケジュールを持って外出していました。今もそれは続けています。「自分はもう分かっているから」と学ばなくなったら、その人の支援力はそこで終わる。利用者にとって、最先端のいいものは、常に取り入れて使っていくと思っています。

**Q** ; 施設に限らず、親御さんからこのような取り組みを取り入れて欲しいという要望、保護者のニーズがあった場合には、先ほどの質問にあったような中堅以上の職員の方々は、取り入れざるを得ないのでしょうか？

**A** ; 最近相談支援事業所で「計画相談」という相談の場を設けているので、保護者のニーズとして計画に反映されていれば、やらなくてはならない。施設においても、相談支援職員が間に入ってニーズを聞き取って、それができるかどうかを施設に問うことはできる。このような取り組みが進めば、ニーズに従って取り組んでいく社会になっていくでしょう。

**Q** ; 実習評定尺度について。自己評価が低い方には有効であると思うが、自己評価が他者評価を上回っている方の場合は、逆効果があるかもしれないということでした。このような方々に対する評定尺度は存在するのですか？項目等、先生のお考えを聞かせてください。

**A** ; 現実を見せることは、時には残酷なこともある。感情的にならずにできないことはできないと教えなくてはならない。それには時間がかかります。支援者である私たちは、あくまでも「役に立ついい人」であらねばなりません。面談の中で「ここは得意だけど、ここはいまいちだね。どうしてだろうね？」というように、本人と敵対せずに「(実習先の企業の担当者に)一緒に聞いてみようか…」というポジションに徹します。本人が納得した時に、実際にできなかったところを具体的に企業側から報告してもらって、次の一手二手を考えてから説明するようにしています。自分でできていると思っていたことが、できていなかった時のショックは私たちでも大きいものです。支援者は、決して敵対しない。一緒に考えるというスタンスを取ります。「こうなんだって。じゃあどうしようか？」ともっていくことで、本人の孤立感はなくなり、一緒に考えられる人になっていきます。実習評定尺度やその他の評価は、本人との話し合う際のツールとなっています。

★★★大澤先生のお話の中では、就労に向けたアセスメントとして、TTAP の実践についても報告がありました。アセスメントの結果、どのような配慮を必要とするのかを、職場とどうすり合わせていくかが支援のポイントになるそうです。就労はいろいろなスキルの集大成。自閉症でない人は自然にやっていることでも、支援者が意識的にアセスメントしていく必要があるとのことでした。 ★★★

# 菜の花リレー

## 一人で行うダイエット

### ～ワークシステムを使って歩こう～

本学級では、朝の活動を、個々の目標やペースに応じて行っています。Aさんは、給食の献立を書く係活動や自立課題、教師との一対一の学習などを行っています。スケジュールは一定ではなく、2、3日のペースで活動の順番を変えています。写真と絵で、朝の会まで、午前中、午後と、一日を3つに区切って提示しています。



高学年になり右肩上がりの体重増加が心配なAさんには、朝の活動の中でグラウンドの築山まで歩く活動を設定したのですが、グラウンドで運動している高等部の体育を眺めていてなかなか帰ってきません。

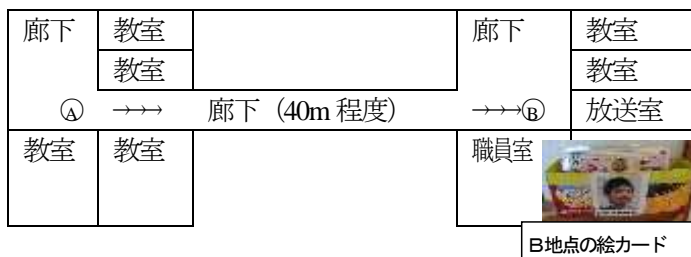
そこで、一人のできる運動を考えました。

<一人で行うための工夫>

Aさんの大好きな食べ物の写真や絵を取りに行くことを目的にして、歩く距離は40m程度と短くして目的地までの見通しが持てるようにしました。

スケジュールで確認したら自分の教室前Aから教室Bまで歩き、絵カードを取ります。絵カードを取ったらAまで戻り、持ってきた絵カードと同じ食べ物の文字カードをはがして、両方のカードを箱に入れます。

40m程の距離ですが、教師の支援がなくても一人で歩けるようになりました。回数もワークシステムを使いながら3往復から始めて、2ヶ月程で10往復以上に増えました。体重は減るまでには至っていませんが、横ばいを保っています。



A地点にあるワークシステム

文字カードで、残りの回数分かる。  
→ 全部なくなったら、おしまい。

終わったら、写真で指定された教師に本を読んでもらえる。

家庭では、家族と一緒に散歩をしたり、放課後支援の施設でも腹筋を行っています。お母さんは、いろいろなところで少しずつ気をつけて運動していることが、右肩上がり脱出の要因かな、とおっしゃっていました。

見通しを持って一人で活動するために、視覚的支援を使うことは当たり前になってきています。今回も、何をするのか、どのくらいするのか、終わったら何をするのかを見て分かるように示しました。一度でうまくいかないことも多いですが、再構造化し、本人が分かるようにしていくことが大切だと思います。

八日市場特別支援学校 田中 律子



# 「お茶飲み話」

実践発表の中で「出前トレセミ」の発表がありますが、発表者以外にも、出前トレセミで学んだ皆さんから、その後の実践状況を取材しましたので、紹介します。

## 「出前トレセミ～その後～」

○教職2年目、中学部教諭 太田さん

1学期、中学部2年生のBさんは、パニックも多く、教師がいつも側についていました。「どうにかしたい」と、夏休みの研修会に参加しました。そこで学んだことを活かして次のような実践を行っています。

〔スケジュール〕



文字と絵で、一日の活動を提示しています。初めは、もっと大きく作ったのですが全体が見やすく、扱いやすいように少し小さく作り直しました。

自分からスケジュールを見に行く姿が見られるようになり、パニックも減ってきたとのことです。スケジュールを見に行かないときは「何やるんだっけ？」と言葉を掛けたこともあったようです。

\*言葉掛けではなく、トランジションカード（スケジュールを見てくださると、伝えるためのカードです）を使うと、もっと早く自立できたかもしれませんね。

〔物理的構造化〕



周りの刺激に弱く離席したり教室の中をピョンピョン跳び回ることがあったので自立課題の場所を衝立で仕切り、入口には段ボールのドアを付けました。入ったら自分でドアを閉めるようになりました。勉強中に立ち上がることはあるけれど、ドアを付けたことで跳び回りはなくなったそうです。



〔コミュニケーションの支援〕

出前トレセミでは、おやつや一对一の場面でのコミュニケーションの支援を見学しました。それを参考にしてコミュニケーションブックを作りました。休み時間に使う遊びグッズの要求や、給食の時間のおかわりの要求場面で活用しています。

○小学部講師 小川さん

夏季休業中の研修会では、「再構造化」について学びました。今までは、教材を作ってもうまく行かないときには、その教材を使うことをやめてしまっていました。研修会では、「その子に合わせて作り直す」ということを繰り返し行い一人では、うまく作れなかった課題も、みんなで話し合いながら、再構造化することができたので、とても楽しかったです。ワークシステムについても、いろいろな形があることを知りました。

その後、自分のクラスのAさんのワークシステムを変更しました。以前は、一つの課題が終わったら棚に戻していたために教師が手を添えたり、言葉を掛けたりしていました。そこで、一人でできるように「左から右」にしました。机と同じ高さにしたので、少しずつだけで、終わりの籠に入れることができるようになりました。



自立課題や一对一の課題の作成では、Bさんの好きなアンパンマンや食べ物を使って、プットイン課題を作りました。持ちやすさや入れやすさを考えて厚みや大きさを決めました。見たらすぐに取り組みむことができ、6つの食べ物を入れる向きを変えながら、一人で全部行うことができました。



Cさんには、色をヒントに行うことができるようなお金のマッチング課題を作りました。

\*夏の研修が生かされて、子ども達が自主的に活動している姿を見ることができて、嬉しかったです。

田中 律子

## 平成26年度TEACCHプログラム研究会総会 第1回専科セミナーのお知らせ

期日；平成26年5月10日（土）13：30～16：30（受付12：20 総会12：50）

場所；千葉県教育会館 大ホール（千葉市中央区4-13-10）

内容；「自閉症スペクトラムの特性理解と支援 ～TEACCHに学ぶ～」(仮題)

講師；佐々木 正美氏（川崎医療福祉大学 特任教授）※問い合わせ、申し込みは事務局まで

<編集後記>

毎年、実践発表をどなたにお願いするか、頭を痛めています。今年は、私の同僚（同じクラス）が行きます。日々の生活に追われ、明日の準備をすることで手一杯。前日まで原稿作りです。原稿を作ってみて改めて、できていないことばかりということに気づかされています。

（田中律子）